

徳山二郎氏を偲ぶ

——ご著書『「人間悪」に甘い日本』に

込められた思い——

佐多 保彦 株式会社東横質 代表取締役社長

「実は昨年の夏から秋にかけて1ヵ月ほど入院して腹の手術をしましたが、大腸ガンのうたがいであります。(中略) 昨年、病気になる前から次の小論を書きはじめ、病床で中断されましたが、最近ようやく達成しました。(中略) どこか「本」にしてくれる出版社をさがしていただけないでしょうか...」

徳山二郎氏から上記のような手紙を受け取ったのは昨年、氏が亡くなられる半年ほど前のことであった。それから心当たりのあるいくつかの出版社をあたったが、残念ながらお力になることができなかった。それがその後、麗沢大学出版会のご尽力のもと、氏の夢が現実のものとなった。10月14日の徳山氏の一周忌を迎え、徳山氏の最後の日本へのメッセージを紹介させていただきたい。

1987年に徳山氏と出会い、それから亡くなられるまでの13年間、素晴らしいご子息お二人にご紹介いただいたり、個人的にお親しくさせていただくと共に、多くのことを氏から学んだ。敗戦後、発足後間もない自衛隊に入られ、幕僚として戦後の日米関係の構築に寄与された。防衛庁が軌道に乗り始めた頃、当時創設されたばかりの日本貿易振興会(JETRO)においてニューヨークのトレード・センター副所長を務め、日本製品の米国市場への売り込みに努力された。また、我が国の総合的なシンクタンクの先駆けとして、野村総合研究所の創設に尽力され、副社長として実務にあたられた。そして、これからの日本には国際的に活躍できる人材の育成が必要と考え、野村マネジメント・スクールを創設し、初代学長となられた。まさに、日本を愛し、日本の行く末を案じて走り続けられた80年であった。

徳山氏は著書の冒頭でこう述べられている。

「人間の本性を大まかに規定した場合、『性善説』と『性悪説』の2つの見方がある。日本はどちらかという『性善説』の国であり、欧米は『性悪説』に立っているといえる。人間とは複雑な生き物であり、『善』をなすこともあれば『悪』をしてかすこともある」。そしてそこから日本の現状を分析する。

「小さい島国の中の『村落共同体』の意識から抜け出せないでいる日本人は、この『性悪説』をとって仲間を断罪することができない。そのために、日本人は正しい理屈であってもあえて自分の意見押し通すことはせずに、情に流されてしまうところがある。その結果、安易に多数意見に迎合し、『個』の意見がなかなか反映されない。『人間悪』に対して、もっと厳しい対処ができれば、強力なリーダー



『「人間悪」に甘い日本』
麗沢大学出版会 本体1,800円

一を育てることなど永遠に叶わないだろう」と。

8月19日付の毎日新聞に「共同体化は国民の性癖」という養老孟司氏の記事が掲載されたのだが、既に徳山氏はこの問題を的確に指摘されていたのだと実感した。記事では、日本のほとんどの団体(会社、病院、政党、組合等)とあらゆる組織)はいずれ「共同化」し、いつしか「面倒を見てもらえる」共同体に安住して、メンバーの利害しか考えなくなるという日本国民の性癖を糾弾されている。

また、アレックス・カー氏(*)が今年1月に上梓された『Dogs and Demons』(邦題予定「犬と鬼」 講談社より今秋刊行予定)の中でも、日本人の民族性に潜む問題点がKey Pointになっており、徳山氏が触れておられる日本人の国民性の弱点が表現され、強く批判をされている。

徳山氏は初め、タイトルを『人間 — この複雑なもの』とされたかったようである。冒頭から投げかけられた「人間とはなにか」という問いに、日本と欧米の人間観の違い、戦争体験から学んだことなどから、氏の人間に対する考察が深く掘り下げられている。人間としての「個」の確立を目指す姿勢は、この人間観と深く結びついていることが分かる。個人的には、タイトルはこちらの方がしっくりくるような気がする。そして、次のような氏の言葉がある。

「『個』を確立していけば、人間は与えられた時代と社会の中での役割を果たしていくことができる。国といい、世界といい、民族といっても、要は『人間』一人一人の生きざまが大切なのだ」。

日本は「構造改革」のスローガンのもと、新しい方向を模索し始めている。今改めて、「この本が僕の人生の卒業論文、そして遺書のようなものです」という国際電話での氏のお言葉が思い起こされる。「村落共同体」の意識から日本人が抜け出せるかどうか、改革の成功の鍵を握っていると氏は見抜いておられたのだ。それは、我々の中に強くある独特の文化、国民としての性癖に、グローバルスタンダードの世界から鋭くつきつけられたナイフのようなものである。つまるところ、日本人の倫理観や宗教観まで問われていると感じるのは私だけだろうか。

この本が英訳され、海外の日本研究者の方々に読まれることを強く願う。日本の抱える問題を深く理解する上で、大いに助けになると共に、彼らから日本も多くのアドバイスを受けることができるに違いない。

徳山氏の生きざまは、それほどまでに私たちに大きなメッセージを残されているのである。その遺言を大切にしていきたい。